

梅若会定式能 平成 27 年 6 月 21 日 (日)

能 『海人』 窀あま
窀くつろぎ

我が子の為に命を捨てても「面向不背の珠」を奪い返す母の母性愛。

そして母親が海人だったことを知った房前ふさざきの大臣 (子方) は母の追善の為、讃岐の支度の浦へ向かいます。

◎ 松山隆之、絢美の親子が共演します。

能 「海人」	前シテ (海人の女)・後シテ (龍 女)	松山 隆之
	子方 (房前 <small>ふさざき</small> の大臣)	松山 絢美
	ワキ (従 者)	森 常太郎

□ あらすじ

母が讃岐の支度の浦の出身で、実は海人だったことを聞き知った房前ふさざきの大臣 (子方) は追善の為に従者 (ワキ) を連れてその地へ出かけられた。

ちょうどその時に異様な姿の海人 (シテ) が来たので言葉をかけた。

話は十三年前、淡海公の妹で唐土高宗皇帝の後である人が興福寺へ差し上げた三つの宝物の事に及んだ。その中の一つ、面向不背の珠がこの地で龍宮に奪われた。淡海公はこの浦の海人乙女と契りを込められ、あの珠を無事奪い返したならば生まれた子を後継ぎにしようと約束された。海人は千尋の縄を身につけて海の底に沈み珠を奪い返す事が出来た。しかし命はなかった。

そうした話をした上で、実は今の房前ふさざきの大臣がその時の子で、自分はその時の海人の幽霊であると告げる。そして供養を頼み、証拠の一書を残して海へと没した。(中入り)

大臣はこの書を披きみて、追慕の思いがいっぱいになり、ねんごろに供養したところ、今は龍女となっている亡き母 (後シテ) が姿を現して成仏出来た事を喜んで舞 (早舞・クツロギ) を舞う。

こうして志度寺は仏教繁昌の霊地となったのであった。

□ 見所

・玉ノ段 前シテ (海人の亡霊) が龍宮から珠を奪い返すところを再現

・小書き・窀くつろぎ は後シテ・龍女の早舞が五段替ノ型になり橋掛りへ行き、三ノ松にて思いにひたる型が入ります。

□ この物語は日本書紀・今昔物語などに拠るもので、志度寺縁起にも記されている。

他に 能 「景清」 シテ 山崎 正道 ワキ 殿田 謙吉

仕舞 「楊貴妃」松山隆雄、 「氷室」梅若基徳、 「歌占」梅若長左衛門

狂言